

モダニズムが夢見たユートピア： ドイツ田園都市建設の歴史(1) ——世紀転換期の生活改革運動——

副 島 美由紀

1. 序

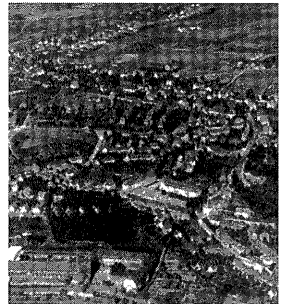
人間が集まって定住し都市が形成されるという過程は、およそ有史以来地球の至る所で綿々と生起してきた現象である。住環境である外的空間と自らの憧憬に満ちた内的空間との乖離が大きくなると、人々は理想都市を夢想し、それを語り記すことによって個人の幸福と共同体的幸福とが両立する空間への希求を他者と共有し、また改善への希望を未来に託そうとしてきた。周知の如く社会の転換期に多く現れたこれら理想の共同体像——ペロポネソス戦争後のアテナイを反映したプラトンの『国家』、ルネサンス期の星状型理想都市や宗教改革前夜の夢とも言えるトマス・モアのユートピア国、産業革命後の空想的社会主義ユートピア等々——が、誕生の先行条件こそ違え、ヘレン・ロウズナウの言うように普遍的な同一の基盤の上に描かれ、様々な環境に対して予定され適応され得るもの¹だとすれば、それは現代社会もユートピアに近似すべく可変要素を含んでおり、これらのユートピア像が我々に改革の指針を与えてくれるということの意味している。

モダニズムのユートピアとも言うべき田園都市の建設運動は、今からちょうど100年前の1898年に出版されたエベネザー・ハワード（Ebenezer Howard）（1850–1928）の著書、『明日の田園都市（Garden Cities of To-

¹ ヘレン・ロウズナウ『理想都市—その建築的展開』西川幸治訳、鹿島出版会、1979、xiii頁。

tomorrow)』²がもたらした影響によって興った。イギリスではレッチワース (Letchworth) とウェルウィン (Welwyn) の二つの都市建設によって理想の実現を見たが、ドイツでの運動は1908年のドレスデン近郊における田園都市ヘレラウ (Hellerau) の建設によって歴史的な足跡を残した。しかしイギリスの田園都市が常に学問研究の対象であったのに対し、ドイツのそれは第二次大戦後大都市に吸収され、その歴史は長い間忘却されていたに等しい。1968年、ハワードの名著の再版³を機にドイツでも田園都市運動の歴史に学問的関心が払われるようになったが、真に実証的な研究が可能になったのはやはりドイツ統一後、特に1993年ヘレラウの記念碑的建築物を接收していた旧ソ連軍が撤退し、ユートピアをめぐる言説が東独時代のタブーから解放されてからのことだと言えよう。返還された建物の改修作業とヘレラウ再評価の動きは自治体活性化への期待をも含めて“ヘレラウ・ルネサンス”と呼ばれているが、モダニズムが見た一つの夢から100年を経た今日、我々の時代はその残滓からポストモダニズムの混沌を越えて何を“復興”することができるのだろうか。

今世紀の始まりに誕生した田園都市という理想の都市像を回顧し、20世紀社会が実現し得たこととし得なかったことについて思いを巡らしてみるのは、世紀の終焉を迎えようとする今日意味のないことではなかろう。本論を含めた今後の数稿が目指す作業は、ヘレラウを中心としたドイツ田園都市建設の歴史を概説することであるが、本論で



現在のヘレラウ

² エベネザー・ハワード『明日の田園都市』長素連訳、鹿島出版会、1968。(1898年『明日—真の改革に至る平和な道 (To-morrow: a Peaceful Path to Real Reform)』という書名で出版されたものが、1902年わずかな改訂を経て『明日の田園都市 (Garden Cities of To-morrow)』として再出版された。)

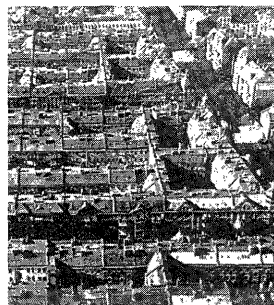
³ Posener, J.(Hrsg.), E. Howard, Gartenstädte von morgen: Das Buch und seine Wirkung. Berlin/Frankfurt a.M./Wien, 1968.

はその端緒としてまず 19 世紀末に興った生活改革運動全体の概観から始めねばなるまい。ハーワードの田園都市構想が理想主義の豊富な遺産を継承しているのと同様、ドイツにおける田園都市運動も産業化社会の歪みを是正する様々な試みの集積という性格を持っていたからである。ドイツの生活改革運動については、個別的に言及されることがあってもその全体像を捉える試みはこれまであまりなされていない。よって本論ではこれらの運動を一つの大きな社会現象として捉え、当時ドイツの社会が希求していた新たな共同体像の把握に努めてみたい。

2. 都市の困難・農村の貧困

イギリスより約半世紀遅れて産業革命が始まったドイツは、19 世紀の半ばに急激な経済成長期を迎えた。それに伴い多くの社会問題も発生したが、特に深刻な問題となったのが人口の農村離脱と都市への流入である。人口の自然増及び行政区改正の結果も影響して、19 世紀半ばから後半にかけてドイツ国内では都市人口の急激な増加が起きている。ある統計によると、人口 10 万を越えるドイツの大都市数は 1850 年の 2 から 1904 年の 41 に、⁴

全人口に占める大都市人口の割合は 1871 年の 4.8% から 1910 年には 21.3% に増加している。一方人口 2 千以下の地域に住む住民は 1871 年の 64% から 1910 年には 40% に減少し、⁵ 人口の流入したベルリンでは 1907 年の人口中、ベルリン生まれの者は 40.5% に過ぎなかったという。⁶



ベルリンのアパート街 (1900 頃)

⁴ Krabbe, Wolfgang R., *Gesellschaftsänderung durch Lebensreform*. Göttingen, 1974, p. 16.

⁵ Linse, Ulrich, *Ökopax und Anarchie*. München, 1986, p. 14f.

⁶ *ibid.*, p. 15.

都市は構造改革を必要としていたが、邦国の王都か重商主義の都でもない限り町はほぼ中世当時のままで、それらの都市でも公共建築物の整備に比べて住宅建設は大きく立ち後れていた。急激な地価の高騰を反映して⁷大都市には“賃貸兵舎 (Mietskaserne)”と呼ばれる高層の粗悪な団地アパートが多く出現するようになる。これら



“賃貸兵舎”アパートの内部(1900)

の住居は狭い上に下宿人を置かなくては支払いが困難なほど家賃が高く、1880年のベルリンでは22%の住居に下宿人や同居人が居たという。一つの部屋に6人以上が寝起きすることも珍しいことではなかった。⁸

国の経済発展と中産階級の成長の裏側で“大衆貧窮”が進行していた。人口の流出した農村部では十分な労働市場を提供する経済活動が困難になる一方で、大都市では過密人口による都市問題が深刻化してゆく。不衛生で劣悪な住環境と食生活の変化による疾病が増加し、犯罪率の上昇と性道德の低下など、労働者階級の“粗暴化”も顕著になる。都市には“水頭症”“文化のペスト腺種”“牢獄”といった汚名が着せられ、⁹大都市嫌悪の風潮は工業化批判や工業化を推進した学問に対する批判と結びつき、文化ベシミズムとなって社会全体に拡がっていった。

19世紀後半に始まったドイツの生活改革運動(Lebensreformbewegungen)はそのような背景のもと、1880年頃から社会的広がりを見せるようになる。それは住宅改革、土地改革、入植運動、菜食主義、自然療法、裸体運動、芸術教育運動、禁酒運動、衣服改革、女性運動、婚姻生活改革、表現ダンスな

⁷ 1860年代から90年代にかけてベルリンの地価は30倍にもなっている。Krabbe, *ibid.*, p. 17.

⁸ *ibid.*, p. 21f.

⁹ *ibid.*, p. 14f.; Fritsch, Theodor, *Die Stadt der Zukunft*. Leipzig, 1896, p. 5.

ど様々な状況改善の試みの総称で、その共通理念は“自然に帰れ”という要請に換言することができる。つまり、農村に人口を還元して産業革命以前にあったとされる社会的調和を取り戻し、自然と結びついた生活を送ることにより産業の機械化によって低下した人間の価値を回復することがその目標であった。生活改革運動の一種である田園都市運動は、1902年「ドイツ田園都市協会 (Deutsche Gartenstadt Gesellschaft)」が設立されたことにより始まる。そして協会の理念によると、田園都市こそ当時のあらゆる生活改革思想が最も確実かつ有益に結実する場所となるはずであった。¹⁰ 以下において代表的な生活改革運動の中から菜食主義運動、禁酒運動、裸体運動、芸術教育運動、土地改革運動、そして入植運動を紹介し、その連関を把握しながら田園都市運動への流れを追ってみたい。

3-1. 菜食主義運動

菜食主義は生活改革運動の中でも最も古い歴史を持つものである。西洋においてヴェジタリアンの祖と呼ばれているのは数学者のピタゴラス (A.D.580-500) で、古代エジプトの宗教とゾロアスター教の影響下にあると言われている“ピタゴラスの教え (Pythagoräismus/pythagoräische Lehre)”は1850年代に“Vegetarianism”という用語が定着するまで“菜食主義”と同義であった。¹¹ 近代の菜食主義は食生活の変化による疾患克服のための食養成という側面も当然持ち合わせてはいるが、その理念は古代の菜食主義と同様宗教に根ざしており、17, 18世紀のプロテスタント宗派が厳格な聖書解釈によって楽園追放以前の菜食生活を再発見したことに始まっている。菜食主義は次第にアングロサクソンの文化圏、特にセヴンスデイ・アドヴェンティストや長老派、クェーカー教徒等の間で広まっていった。最初の菜食主義協

¹⁰ Krückemeyer, Thomas, Gartenstadt als Reformmodell. Siegen, 1997, p. 31f.

¹¹ Baumgartner, Judith, Ernährungsreform—Antwort auf Industrialisierung und Ernährungswandel. Frankfurt a.M., 1992, p. 93.

会がイギリスに誕生したのは1847年で、長老派の生理学者シルヴェスター・グラハム (Sylvester Graham) が創案したグラハム・ブレッドやセヴンスデイ・アドヴェンティストの医学博士ジョン・バーヴェイ・ケロッグ (John Harvey Kellogg) によるシリアル食品等、この頃の産物である健康食品は少なくない。『生活改革による社会変革 (Gesellschaftsänderung durch Lebensreform)』(1974)の著者、クラッベによると、ピタゴラス時代の菜食主義と近代の菜食主義の相違点は倫理的基準に加えて栄養学的な観点が備わっているかどうかにあるのではなく、時代の要請によって組織的運動になり得たかどうかにあるという。¹²

ドイツにおける菜食主義運動は、牽引役となったのが3月革命の闘士達であったことにその特徴がある。ルソーの影響を強く受けたグスタフ・フォン・シュトルーヴェ (Gustav von Struve) (1805-1870) やフランクフルト憲法制定会議の民主派議員だったエドゥアルト・バルツァー (Eduard Baltzer) (1814-1887) 等で、彼等は1848年の革命挫折の後、生活改革に政治活動の代替物を求めたと言われており、¹³ ぞれ菜食主義協会を設立し、著作活動¹⁴を通して菜食主義理論の確立に努めた。特にドイツ菜食主義運動最大の理論家であり自由教会派の牧師でもあったバルツァーは、人類が果実を主食とすべく創造されたという教義を説き、自然との調和という観点からあらゆる殺生を禁じて家畜を使用しない農業と動物愛護を奨励した。精神と魂の器である肉体をいかにして清浄に保つかという問題だった菜食主義は、次第に自然環境を視野に入れた世界観的な広がりを持つようになる。バルツァーの教えによれば菜食主義とは個々人の内面において自然との近縁性を高める抽象的なユートピアであると同時に社会的な改革でもあり、菜食主義者達はこの運動

¹² Krabbe, *ibid.*, p. 51.

¹³ *ibid.*, p. 57; Baumgartner, *ibid.*, p. 94.

¹⁴ Baltzer, Eduard, *Die natürliche Lebensweise*, 4 Bde., Nordhausen, 1867-1872. Struve, Gustav von, *Pflanzenkost: die Grundlage einer neuen Weltanschauung*. Stuttgart, 1869.

があらゆる生活改革の中で最も高次で徹底した段階であるという自負を持っていた。¹⁵

バルツァーの影響を受け、菜食と動物保護による生態平和の福音を説く説教師達が現れるようになる。『新しい信仰 (Neuer Glaube)』(1895) を出版し、H・ヘッセに影響を与えたとされている¹⁶ シュヴァーベン思索家クリスティアン・ヴァーグナー (Christian Wagner) やモンテ・ヴェリタのアウトサイダー的求道者グスト・グレーザー (Gusto Gräser) (1879-1958)¹⁷ 等、“自然食運動の使徒 (Kohlrabi-Apostel)” と呼ばれる探求者達である。また、当時はいわゆる“疑似宗教のインフレ時代”でもあった。東洋思想やカバラの影響を受けた神智学やゾロアスター教の再興運動であったマズダ教等も菜食・禁酒・動物愛護を奨励しており、人智学の R・シュタイナーも穀物を中心とした食事と環境平和的農業を推進しようとしていた。¹⁸

人間らしい理性的な生活と自然の法則に即した経済活動の探求は、当時影響力を持っていたダーヴィニズムとも矛盾しないものだった。菜食主義は反近代主義者のみならず進歩主義者達にも受け入れられるようになり、1892年には「ドイツ菜食主義同盟 (Deutscher Vegetarierbund)」が個々の地方組織をまとめて全ドイツ的組織となる。その翌年スイスに誕生した菜食主義者の入植協同組合「ハイムガルテン」や、ベルリン郊外にできたドイツ最初の入植運動「果樹園コロニー・エデン」、またシュタイナーやヘッセ等が集ったアスコーナのモンテ・ヴェリタ、フリードリヒスハーゲンの文学サークルから生まれた「新共同体 (Neue Gemeinschaft)」等はみな菜食主義を信条としていた。そして後述するように、「ドイツ田園都市協会」は主にこの「新共同体」の理想主義者達によって創設されるのである。

¹⁵ Krabbe, *ibid.*, p. 48.

¹⁶ Linse, *ibid.*, p. 63f.

¹⁷ Linse, Ulrich, *Barfüßige Propheten: Erlöser der zwanziger Jahre*. Berlin, 1983, p. 68ff.

¹⁸ Baumgartner, *ibid.*, 74, p. 91.

第一次大戦後多くの生活改革運動は影響力を失い、菜食主義運動も下火になってゆく。エデンとモンテ・ヴェリタを除くと当時のコロニーはすべて1920年頃までに経営難による破綻を迎えた。が、革命時の民主派が推進した菜食主義運動はそもそもロマン主義と革新的な敬虔主義という二つのドイツ的伝統の上に立脚したものであり、地上における千年王国的ヴィジョンの世俗化された形態はその後も様々なかたちで顕れることになる。例えば指導者待望の心理は“自然食運動の使徒”達によって第一次世界大戦を越えて担われていき、¹⁹ 菜食主義運動は70年代の新たなエコロジー運動の文脈において再生する。また、革新的な理想の実現に向かうドイツの伝統の力を、我々は今日でも「緑の党」のようなオールタナティブ運動に窺うことができるのである。

3-2. 禁酒運動

後述するような“大都市脱出”や菜食主義のようなイデオロギー変革を伴わずして生活改善を可能にする方法として、禁酒運動は重要な生活改革運動の一つであった。原理的な源は菜食主義と同じく清教徒的禁欲主義にあり、1826年ボストンでの節酒協会設立以来、運動はプロテスタント圏内を中心としたヨーロッパにも拡大していった。教会主導型であった当初の運動に代わって学問的見地に基づいた近代的禁酒主義が登場してきたのは、飲酒の行動が産業化社会の構造を反映して変化していった1880年代半ばのことである。当時アルコール受容の中心が以前の火酒から瓶入りビールに移り、ビールの消費量が半世紀の間ほぼ3倍に増加するという変化が起きていた。醸造業の大規模化が大量消費を可能にし、北ドイツ同盟における職業の自由化によって酒場の数とリキュール類の消費量も同時に増えている。²⁰ 社会には代

¹⁹ Linse, *ibid.*; Hesse, Hermann, *Die Morgenlandfahrt*, in: Herman Hesse, *Gesammelte Werke*, Bd. 8, Frankfurt a.M., 1970.

²⁰ Baumgartner, *ibid.*, p. 98f.

替となる娯楽が少なく、労働者にとって酒場以外に社交の場を見いだすことは困難であった。アルコール問題は大都市問題とも密接に結びついていたのである。ドイツにおける近代的禁酒運動の中心となった団体、「ドイツ暴飲対策協会 (Deutscher Verein gegen den Mißbrauch geistiger Getränke)」、
「青十字節酒協会 (Mäßigkeitsverein des Blauen Kreuzes)」、
「国際禁酒協会ドイツ支部 (International Order of Good Templars)」等は以下のような国民経済上・公衆衛生上の4つの見地から、禁酒・節酒運動を展開している。

1. 生理学的見地：飲酒は体質の弱体化をもたらす。
2. 人種主義的衛生学的見地：飲酒は遺伝的疾患をもたらす。
3. 国民経済的見地：健康で屈強な国民のみが国際的競争に勝ち得る。
4. 心理学的見地：飲酒をしないの方が、生活と労働に対して建設的である。²¹

ドイツにおけるダーヴィニズムの提唱者であるエルnst・ヘッケル (Ernst Haeckel) も所属していた「ドイツ暴飲対策協会」は、教育、栄養問題、住宅問題等、その他の生活改革の分野と関連した節酒啓蒙活動を行い、アルコール中毒矯正施設や娯楽施設の建設といった現実的なプログラムにより持続的な禁酒の定着を狙った。1902年、協会は下部組織にあたる「ドイツ居酒屋改革協会 (Deutscher Verein für Gasthausreform)」を設立し、娯楽施設を公有化してその領域からアルコールを遠ざけ、喫茶店やアルコールを置かない飲食店を増やし、さらには都市に図書室や談話室を設置するなどの運動を展開している。²² この頃からドイツにおける禁酒運動は労働運動や社会民主主義運動、芸術教育運動や青年運動等と関わる広がりを持つようになるのである。

社会民主党の代表として1919年オーストリア首相に、さらに後年連邦大統領

²¹ Krabbe, *ibid.*, p. 38.

²² *ibid.*, p. 41ff.; Baumgartner, *ibid.*, p. 100.

領になるカール・レナー (Karl Renner) (1870-1950) は、1905年に誕生したプロレタリア的旅行クラブ「自然友の会 (Die Naturfreunde)」の創立メンバーであるが、後年この運動を回顧して次のように語っている。「プロレタリアは (...) 自然からも締め出されていた。 (...) 夜は外気も入らず光も射さないあばら屋に押し込められ、昼は産業監督官の目もめったに届かない工場や作業場に集められるプロレタリアが、途中の休憩時間に頼みにするものといえば、居酒屋の小部屋であり、アルコールという慰めだった。プロレタリアにとっては自然を、つまり力と美の無尽蔵の源泉を持つ自然を、人間の精神によって徐々に秘密を暴かれてきた驚くべき法則を持つ自然を、奪い返すことも重要なことだったのだ。」²³ アルコールを手にする代わりに「自然の中に出てゆく」ことを労働者に勧奨した「自然友の会」の自然への信頼を裏打ちしていたのは、ブルジョワ的なヴァンダーフォーゲルや民族的な郷土保護運動におけるような新ロマン主義よりもむしろ世俗化されたダーヴィニズムの進歩思想だった。レナーは社会民主主義の観点から、多種多様なプロレタリア文化団体の擁護者となる。

青年層のための啓蒙活動を展開したのは「国際禁酒協会」である。²⁴ 社会制度としてのアルコール消費に着目したこの団体は、青年組織を形成して若年層を早くから啓蒙することでアルコール依存の潜在的可能性を最小限に止めようとした。1888年以来労働者や手工業者、学生や高校生に対する活動を行い、1914年には1800の支部に6万の会員、600の青年組織に3万の会員を有するドイツ最大の禁酒運動団体となっている。後述する芸術教育運動の雑誌「芸術の番人 (Kunstwart)」及び芸術活動団体である「デューラー同盟 (Dürerbund)」でも禁酒を支持していた。

田園都市のアルコール対策は「ドイツ田園都市協会」のプログラムにはっきりと明示されている。イギリス式一戸建て住宅の建設は換気や採光に気を

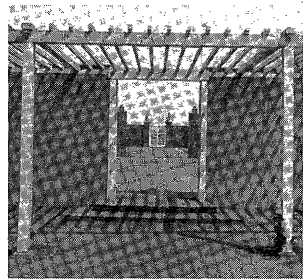
²³ Linse, *Ökopax und Anarchie*. p. 50.

²⁴ Krabbe, *ibid.*, p. 45f.

配った住宅改善を可能にし、各戸に設置された庭は余暇を自宅で過ごす可能性を生み、情操面での生活改善に役立つはずであった。酒場の数を制限して飲酒を抑制し、コンサートホールや図書館の建設によって芸術教育を行うこともその重要な目標の一つであった。²⁵ 現に田園都市ヘレラウに居酒屋と呼ばれ得るものは一件しかない。

3-3. 裸体運動

裸体運動は1854年、スイスの自然療法医アルノルト・リクリ（Arnold Rikli）が自分の療養施設に設けた日光浴場から派生したと言われていた。²⁶ 以降、自然療法及び菜食主義の広まりと共に日光・空気浴場も流行し、同時に裸体運動も社会に広まっていった。それは健康上の運動であると同時に肉体的なものに対する過少評価や羞恥心を克服して肉体と精神の調和のとれた発達を目指す社会運動でもあり、その理念は当然ヴァンダーフォーゲルのような青年運動や表現ダンス運動等と通底するものである。



ヘレラウ，ダルクロース学校の日光浴場

裸体運動の代表的推進者として挙げられるのは、ヨハネス・グットツァイト（Johannes Guttzeit）、リヒャルト・ウンゲヴィッター（Richard Ungewitter）、ハインリヒ・プードア（Heinrich Pudor）、画家のカール・ヴィルヘルム・ディーフェンバッハ（Karl Wilhelm Diefenbach）とその弟子フィードゥス（Fidus）等である。裸体を多く描いたフィードゥスの作品は有名であるが、これらの運動家は実によく活字を利用して観念的な啓蒙活動を行っていた。中でも重要なのは雑誌「力と美（Kraft und Schönheit）」（1901）の創刊であ

²⁵ Schollmeier, Axel, *Gartenstädte in Deutschland*. Münster, 1988, p. 68.

²⁶ Krabbe, *ibid.*, p. 93.

り、それは「ドイツ理性的体力増進協会 (Deutscher Verein für vernünftige Körperzucht)」のための機関誌の役割を果たした。協会は後にハンブルクやフランクフルトにも支部を持ち、名誉会員にドイツ参謀総長のフォン・モルトケを擁する「ドイツ身体文化協会 (Verein für Körperkultur)」となる。²⁷ヌーディスト達は多くが菜食主義者でもあり、「自然食運動の使徒」であった。特に雑誌「新しき人間 (Der neue Mensch)」の編集に加わっていたヨハネス・グットツァイトは菜食主義グループ「ピタゴラス同盟 (Pythagoräerbund)」(1884) を設立し、「自然の伝道者 (Naturprediger)」を自認していた。チュニカと呼ばれる長衣を身に纏い、新たな倫理観を説く予言者然とした彼等は文学者達の関心を引く。フィードゥスと共にフリードリヒスハーゲン文学サークルに関わったゲアハルト・ハウプトマン (Gerhart Hauptmann) (1862-1946) は、グットツァイトをモデルにした短編「使徒 (Der Apostel)」(1890) の中で倫理的菜食主義を唱えながら日光による裸体の浄化と解放を信じる若き宗教家を描き出している。自らが救世主だという幻想に取り付かれた求道者のモチーフは、後年「愚かなるキリスト者 エマヌエル・クヴィント (Der Narr in Christo Emanuel Quint)」(1910) へと発展することになる。また、トーマス・マンの「予言者の家で (Beim Propheten)」(1904) に登場するのは好奇心と暇を持て余した都会のインテリ達に救済の教えを説く尊大な説教師達だ。ミュンヘンのルードヴィヒ・デルレート (Ludwig Derleth) がモデルであると言われていこの短編は、当時の「賃貸兵舎」内の狭苦しい住居の様子も巧みに描写している。同じくマンの「神の剣 (Glaudius Dei)」(1904) や、アスコーナのグ



ディーフェンバッハ (1851-1913) とフィードゥス (1868-1948) (1888 頃)

²⁷ *ibid.*, p. 94.

スト・グレーザーを登場人物の雛形とするヘッセの「東方巡礼(Die Morgenlandfahrt)」(1932)²⁸等、世紀転換期の“インフレ聖者達”や千年王国への憧憬を題材にした文学作品は多い。作家達も「黙示録的な興奮状態」²⁹を共有していたのである。

裸体主義者の雑誌として次に挙げるべきは、ハインリヒ・プードア(1865-1941)の「美(Die Schönheit)」(1903)である。官能に対する健全な思考の涵養を目的としていたこの雑誌は、後年ナチスのイデオロギー形成に関わる³⁰カール・ハインリヒ・シュトラッツ(Carl Heinrich Stratz)の『女性の人種美(Die Rassenschönheit des Weibes)』(1901)やパウル・シュルツェ-ナウムブルク(Paul Schulze-Naumburg)の『婦人服の基礎としての女性の身体文化(Die Kultur des weiblichen Körpers als Grundlage der Frauenkleidung)』(1902)といった著書を高く評価していた。³¹その後プードアの思想は肉体の解放といった側面から肉体的な克己による人格形成といった教育的側面に重心を移していく。³²

1910年、ヘレラウの建築・芸術監督委員会はコミュニティが推進すべき芸術としてダンスを選び、リズムと音楽による新たな身体教育プログラムを持っていたダルクローズ学校を誘致する。この新しい共同体は恐らくプードアにとって理想的な活動の場であったろう。ヘレラウ移住後、彼は「美」に関わっていたブルーノ・タンツマン(Bruno Tanzmann)(1878-1939)と共



「空気・日光・太陽浴を！」
フィードウスの素描(1901)

²⁸ 註19を参照。

²⁹ Linse, Barfußige Propheten, p. 28.

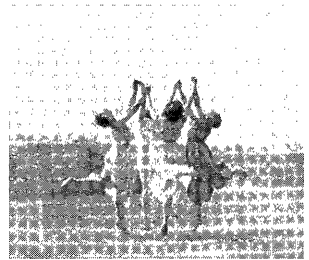
³⁰ 副島美由紀「近代《病理》のイコノグラフィー」in：小樽商科大学『人文研究』第91輯，1996，189-194頁。

³¹ Die Schönheit, 18. Band, Heft 3, p. 49; Krabbe, ibid., p. 95.

³² Pudor, Heinrich, Erziehung ohne Bücher, in: Die Schönheit, 18. Band, Heft 3, p. 37-39.

に「ハーケンクロイツ出版社」を設立し、民族的思想の普及に努めることになる。³³ タンツマンは芸術教育家フェルディナント・アヴェナーリウスに詩作を認められて活動を開始した作家で、やはり民族主義的教育に関心を持っていた。そして20年代初めに農業学校を設立して文字通り「血と大地」のイデオログとなるのである。³⁴ 田園都市における人種的対立の種は早くから蒔かれていた。

第一次世界大戦後、裸体運動(Nacktkultur)はある種のいかがわしいイメージを払拭するためヌーディズム(Freikörperkultur)と名前を変えて復活する。そして公営のスポーツ施設や体育大学を生み出してゆく大きな身体文化の流れに合流してゆくのである。その意味で裸体運動は生活改革運動の中で最も広範な効果をあげた運動だと言えよう。ハリー・ケスラー伯爵の1930年の日記を引用してみよう。彼はある日外務次官に連れられてベルリンの体育大学を見学に行く。後にベルリン・オリンピックを指揮するカール・ディーム博士が1920年に設立した学校である。その時の印象を彼は次のように記している。「広々とした校内には陽光が燦々と降り注ぎ、各種のスポーツの練習に励む殆ど裸体に近い若者達の活気がみなぎっていた。その明るい光と暖かく香しい空気に包まれての印象はまさにギリシャ的であった。(…)裸体、光、空気、そして誤った羞恥心や綺麗事なしに、生を、肉体的完全を、感覚を讃える生き方。現代の若者にあって、肉体が、肉体にまつわる現実が、この運動の波に従っている様子は驚嘆すべきことでもある。今日の若者達は戦



ヘレラウのリトミック体操

³³ Sarfert, Hans-Jürgen, Hellerau: Die Gartenstadt und Künstlerkolonie. Dresden, 1992, p. 91.

³⁴ Fasshauer, Michael, Das Phänomen Hellerau: Die Geschichte der Gartenstadt. Dresden, 1997. p. 256.

前の若者達と較べるとなんと美しいのだろう。人々が裸体で歩くことを恥ずかしがらなくなつて以来、民族の肉体は花と開いたのだ。」³⁵

生活改革運動が本来の政治的急進性を発揮することなく政治に手なずけられていったというウルリヒ・リンゼの見解³⁶は正しいだろう。が、労働者のための都市計画の重要性を説いた建築家のオットー・マルヒ (Otto March) の「彼らの栄養力と防衛力は国家の関心事である」³⁷ という発言にも表れているように、生活改革運動の思想自体に社会ダーヴィニズムもしくは富国強兵の理念に転化してゆく要素が内在していたことも、見逃してはならない事実である。

3-4. 芸術教育運動

産業化が社会にもたらした文化ペシミズムを乗り越えて国民が健全な理想主義的感情を取り戻すためには、何らかの精神的改革が必要であった。肉食主義の世界観や新しい身体文化の創出等と並んで、芸術教育家達も新たな情操教育の必要性を説いた。学問や科学における分析主義的細分化や合理的概念的知主義に対し、芸術の分野で最初に批判の声を上げたのはユリウス・アウグスト・ラングベーン (Julius August Langbehn) (1851-1907) である。彼は著書『教育者としてのレンブラント (Rembrandt als Erzieher)』(1890)において、レンブラントの絵画に見られる光の明暗に象徴されるような内面的な非合理性を芸術の本質と見なし、個人存在の内実を表現するための芸術教育の必要性を説いた。しかし彼の称揚する「ドイツ精神の原則としての個人主義」が、それを統合して (konsolidieren) 一つの壮大な文化に作り上げる (monumentalisieren) ための基盤として考えられていた³⁸ ことは、

³⁵ Graf Kessler, Harry, Tagebücher 1918-1937. Frankfurt a.M. 1996. p. 674.

³⁶ Linse, Ökopax und Anarchie. p. 20.

³⁷ Hartmann, Kristiana, Deutsche Gartenstadtbewegung. München, 1976, p. 16.

³⁸ Langbehn, Julius, Rembrandt als Erzieher. (61-66. Auflage) Leipzig, 1925, p. 48.

まさに当時の社会心理の反映であると言えよう。ドイツは国民の一体化を可能にする文化的スタイル、特に民族的な絆を必要としていた。ラングベーンの著作の影響は大きく、それは「新たな芸術時代の到来を宣言した」³⁹とまで言われている。生活改革運動における芸術への希求は、この時観念的契機を与えられて現実的基盤に広がってゆく。

例えば入植運動の草分けは、実はラングベーンの影響を受けたとされるヴォルプスヴェーデの芸術家達であると言われているが、⁴⁰ 芸術教育は入植運動にとって最初から不可欠な要素であった。この頃イギリスでは手仕事の有する人間形成的意義によって労働と生活と芸術の調和を目指したアーツ・アンド・クラフツ運動が興っており、その影響もあってドイツにおける芸術教育運動も労働者を含めた国民全体を対象としたものだった。リヒャルト・ヴァーグナーの甥で作家のフェルディナント・アヴェナーリウス (Ferdinand Avenarius) (1856-1923) は「芸術の番人 (Kunstwart)」(1887) を創刊して安価な芸術出版物を多く発行し、芸術運動組織「デューラー同盟 (Dürerbund)」(1903) を興している。「デューラー同盟」は郷土芸術運動の最も重要な発言者となった。⁴¹ 彼が支援した若き芸術家達の中にはゴットフリート・ケラーやヴィルヘルム・ラーベ、マックス・クリンガーやフーゴ・ヴォルフ等がいる。オーストリアの教育者ユリウス・ライシング (Julius Leisching) もやはり1887年、ハイキング・サークルから発展した芸術活動グループ「ウィーン芸術友の会 (Die Gesellschaft der Wiener Kunstfreunde)」を作っている。⁴² 身体文化に基づいた情操教育の一例である。

芸術教育運動を教師を主体とした組織的運動へと拡大し、学校教育の場に浸透させたのがハンプルク美術館の初代館長アルフレート・リヒトヴァルク

³⁹ Hartmann, *ibid.*, p. 16.

⁴⁰ Krückemeyer, *ibid.*, p. 30.

⁴¹ Linse, *ibid.*, p. 15.

⁴² A・リヒトヴァルク『芸術教育と学校』岡本定男訳、明治図書、1985、159頁。

(Alfred Lichtwark) (1852-1914) である。彼は 1896 年⁴³「学校における芸術教育促進教員連盟 (Die Hamburger Lehrervereinigung zur Pflege der künstlerischen Bildung in den Schulen)」を組織し、「ディレクタントの育成が純粋な芸術能力を促進する」⁴⁴ という理念から芸術愛好家の底辺の拡大に尽力した。

田園都市運動は当然芸術教育に関しても意欲的であった。アヴェナーリウスもリヒトヴァルクもプロパガンディストとして「ドイツ田園都市協会」に参加している。⁴⁵ また、同協会の会員でプロイセン商務省付の建築家であったヘルマン・ムテージウス (Hermann Muthesius) (1861-1927) も芸術教育運動の重要な推進役の一人であった。ムテージウスは 1896 から 7 年間イギリス大使館に勤務した間、建築の空間構成が人格に与える影響の大きさを痛感するに至る。帰国後イギリス式一戸建て住宅の建設推進に努め、居住空間の美こそ芸術教育の始まりであると主張して芸術家の間に物議を醸した。⁴⁶ 住居の質的改善を図ることが国民の精神的レベルを向上させるという信念を持っていた彼は、リヒャルト・リーマーシュミット (Richard Riemerschmid)、ハインリヒ・テッセノウ (Heinrich Tessenow) と並んでヘレラウ建設に関わる 3 人の重要な建築家の一人となる。ヘレラウの子供達は改善された住居に住み、ダルクローズ学校でリトミック体操を学び、放課後「ドイツ・クラフト工房 (Deutsche Werkstätten)」や芸術家コロニーのアトリエに通って工芸を学ぶことになるのである。⁴⁷

⁴³ 雑誌「青年 Jugend」創刊の年でもある。

⁴⁴ A・リヒトヴァルク、同上、166 頁。

⁴⁵ Hartmann, *ibid.*, p. 19.

⁴⁶ Hartmann, *ibid.*, p. 132. 註 56.

⁴⁷ Theil, Carl, Neue Schule Hellerau, in: Die Schönheit, 18. Band, Heft 3, p. 35-37.

3-5. 土地改革と入植運動

1922年、バーデン・ヴュルテンベルクの牧師ラインホルト・プランク (Reinhold Planck) はその著書の中で次のように記している。「もしビスマルクが理想的な現実的政治家であったならば……, 生まれて間もない帝国に大都会の土地投機という試練を与えるなどあり得ないことだったろう。この土地投機は大土地所有による東エルベの土地封鎖と結びつき, 田舎の人々を大都会へと追い立てて都市の新住民を増大させ, 彼等が無防備のまま不労所得の, つまり取引所の, 食いものにされるにまかせた。」⁴⁸ 3月革命の際に「大土地所有者権益擁護同盟」を結成してユンカー勢力の結集を図ったビスマルクに対する批判である。プランクの父でマウルブロン神学校長でもあった哲学者のカール・クリスティアン・プランク (Karl Christian Planck) (1819-1880) は、『あるドイツ人の遺言 (Das Testament eines Deutschen)』(1881) その他を著してローマ法ならぬドイツ法による土地改革案を提唱した人物である。ドイツ法とは土地を社会の共有財産となし, 個人的利用のためにのみ個々の家族に委託するという古代ゲルマンの土地利用法であるが, その名は何であれ抜本的な住宅改善を行うには土地改革, しかも土地の公有化が必要であるという認識はリベラルな住宅改革派の間には早くから存在していた。

ドイツにおける最初の住宅改革論者と呼ばれるヴィクトール・エメ・フーバー (Victor Aimé Huber) (1800-1869) はシュレジアの織工一揆と3月革命を経た1848年に, また菜食主義の理論家エドゥアルト・バルツァーも1873年の著作『社会改革案 (Ideen zur sozialen Reform)』の中で既に土地の公有化を訴えている。が, 80年代になって土地改革論議に弾みをつけたのは土地問題の最初の体系的理論家と呼ばれるアメリカのヘンリー・ジョージ (Henry George) (1839-1897) であった。地代をすべて国庫に入れる単一税の導入と土地の国有化を説いた『進歩と貧困 (Progress and Poverty)』(1879)

⁴⁸ Linse, *ibid.*, p. 23f.

は出版の翌年ドイツ語に翻訳されて土地改革論者の反響を呼んだ。

1886年、リベラル派による最初の土地改革グループ「土地連盟(Landliga)」が資本の集中と大土地所有の関係を断ち切るため土地の国有化を提唱する。また民族主義派の陣営でも「ヒトラー以前の

最大の反ユダヤ主義者」⁴⁹と言われるテオドール・フリッチュ(Theodor Fritsch)(1853-1933)が社会保守的な目的において土地の公有化案を提示していた。⁵⁰にも拘わらず、彼等の要求は社会の上層部に顧みられることがなかった。

この間、公正な土地利用の方策を求める人々の要求は高まってゆく。1889年、帝国議会で有限責任協同組合法が成立し、住宅建設組合や入植組合などが宅地開発に関与できるようになる。前述の菜食主義コロニー、ハイムガルテンやエデンはこのような組合組織であった。また、ハワードにも影響を与えたクロポトキン⁵¹の社会主義的入植理念がグスタフ・ランダウアー(Gustav Landauer)(1870-1919)によってアナルコ・ソーシャリスト達にもたらされ、1890年頃から公有地の占拠も含めた様々な入植運動の動きが活発化する。

入植運動は言わば生活改革と青年運動の混合のようなもので、農業ロマン主義と大都市敵視とが結びついて1920年代までに起きた



「第3の道」資本主義と共産主義の間に土地改革の道がある。フィードウスの素描(1901)



理想の入植地を描いたマックス・シュルツェ・ゼルデの絵画(1920頃)

⁴⁹ Phelps, Reginald H., Theodor Fritsch und der Antisemitismus, in: Deutsche Rundschau, 87/1961, p. 443.

⁵⁰ Fritsch, Theodor, Die Stadt der Zukunft. p. 15.

集団的な大都市離脱現象である。土地改革運動や資本主義経済批判と相互補完的な役割を果たし、テオドール・ヘルツカ (Theodor Hertzka) (1845-1924),⁵¹ フランツ・オッペンハイマー (Franz Oppenheimer) (1864-1943), ズィルヴィオ・ゲゼル (Sylvio Gesell) (1862-1930)⁵² といった共同体運営の理論家を生む。それぞれのコロニーはキリスト教や反宗教主義, 民族主義, 無政府主義, 菜食主義, 身体主義等どれも複数の信条を掲げていたが, 土地資本主義に抗する土地の公有化要求はどの共同体にも共通した理念だった。

土地改革運動が何らかの社会的影響力を持つようになるのは, 「土地連盟」の後身「ドイツ土地改革同盟 (Bund deutscher Bodenreformer)」が土地の国有化というラディカルなスローガンを取り下げて中道路線を取るようになってからのことである。新しい改革方針の推進役となったのは, 後にヴァイマル憲法の起草者となるフリードリヒ・ナウマン (Friedrich Naumann) (1860-1919) と共にドイツ国民社会党の創設に加わり, 積極的に政治活動を行っていたアドルフ・ダマシュケ (Adolf Damaschke) (1865-1935) である。ダマシュケの掲げた目標は, 国の基盤となる土地を公共経済的財産として扱い, 投機や不労所得の対象にすることなく有効利用せしめるような法の下に置くことだった。その具体的対策として同盟が要求したのは, 公共経済的地価の導入, 地価上昇分への課税, 休閒地の収用許可等である。ダマシュケはリベラル派に理念の後退を非難されながらも『土地改革 (Die Bodenreform)』(1906) 等の著作活動を通して土地問題に対する社会的認識の高まりに貢献し, 後に「土地改革の父」⁵³ と呼ばれるようになる。しかしながら同盟が達成できたことは多くはなかった。1911年, 帝国議会は上昇地価分への課

⁵¹ ヘルツカの理想郷については以下で紹介されている。ルイス・マンフォード『ユートピアの系譜：理想の都市とは何か』関裕三郎訳, 新泉社, 1983, 131-140頁; 川端香男里『ユートピアの幻想』, 1971, 潮出版, 160 f. 頁。

⁵² ニーダーザクセン州の「緑の党」発起人ゲオルク・オットーは, ゲゼルの運動から緑の象徴を受け継いだと主張している。Linse, *ibid.*, p. 168. 註 1.

⁵³ Winters, Peter Jochen, Wie kann man die Bodenspekulation eindämmen?, in: Frankfurter Allgemeine Zeitung Nr. 152, 6. Juli 1971, p. 20.

税を決定するが2年後にそれを撤回し、法の運用を各州に任せてしまう。同盟の要求中、休閒地の収用と永小作権、永使用権の確保は1918年のヴァイマル憲法と1920年の帝国住宅建設法によって認められたが、それはリベラル派が批判したように⁵⁴労働者の住宅問題に本質的に関るものではなく、改革とはとうてい言い難いものであった。土地を国民の共有財産とし、良質の住居を計画的に安定供給するという当時の進歩的な改革案は、結局実現しなかったに等しい。上述の告白を行ったラインホルト・ブランクは、社会民主主義政党もこの点においては1918年の革命以後何一つ変更を加えたことがなかったという失望を述べている。結局彼は「公共の土地所有権という原則」を実行してくれることをナチスに期待するようになるのである。⁵⁵

土地改革は生活改革の根幹に関わり、社会改革及び社会保守の両派が共に支持した理想であったにも拘わらず、その反資本主義的性格故に最も効果をあげることが少なかった運動である。恐らく土地をめぐる状況は、100年前の協同組合にまだ改革の夢があったことを除いては今日も当時とさほど変わってはいないだろう。二つの田園都市を成功させたイギリスでも、戦後の社会福祉国家ヴィジョンによるニュータウン計画は労働党と保守党の両政権の間で揺れ動き、結局1978年に放棄されている。⁵⁶1908年、土地の公有化を待たずにヘレラウの建設が始まった時、工場用地以外の土地を所有したのは「有限会社ヘレラウ田園都市協会」と「ヘレラウ住宅建設組合」の二つの公益団体だった。⁵⁷

⁵⁴ Linse, Ulrich (Hrsg.), *Zurück o Mensch zur Mutter Erde*. München, 1983. p. 27.

⁵⁵ Linse, *Ökopax und Anarchie*. p. 24.

⁵⁶ 東秀紀『漱石の倫敦、ハワードのロンドン：田園都市への誘い』中央公論社、162-165頁。

⁵⁷ Rössger, Mirjam, *Die Baugenossenschaft Hellerau*, in: *Dresdner Hefte* 15. Jahrgang, Heft 51. p. 41.

4. ドイツ田園都市協会の誕生

ハワードの田園都市構想がドイツで受け入れられる土壌は十分に整っていた。1900年には社会民主党の機関誌「新時代 (Die Neue Zeit)」が『明日の田園都市』の書評を載せ、⁵⁸ 2年後の1902年に「ドイツ田園都市協会 (Deutsche Gartenstadt Gesellschaft; 以後 DGG と略記)」が誕生している。DGG 成立の母胎がフリードリヒスハーゲン文学サークルの後身とも言える「新共同体」であったことは、ラングウアーやキャンプマイヤー兄弟 (Paul und Bernhard Kampffmeyer) 等の政治活動家、ブルーノ・ヴィレ (Bruno Wille) やヴィルヘルム・ベルシェ (Wilhelm Bölsche) 等の汎神論的エコロジスト達といったその構成員を考えてみればさほど異とするに足らぬ事実である。ハワードの共同体理念に共感した DGG は当初具体的な現状改革案を持っていたわけではなく、あくまでも「田園都市」という概念の普及を目指すプロパガンディストとしての性格を自認していた。創設メンバーにはハルト兄弟、ラングウアー、⁵⁹ ベルンハルト・キャンプマイヤー、ヴィレ及びベルシェ、フィードゥス、入植理論家のオッペンハイマー、「果樹園コロニー・エデン」のリーダーとなるオットー・ヤキシシュ (Otto Jackisch) 等があり、⁶⁰ 初代の会長はハインリヒ・ハルト Heinrich Hart (1855-1906) であった。創設当初の DGG は土地の公有化などユートピア的な要請を掲げていたためか多くの支持を得ることはなかったが、転機が訪れたのは1907年、キャンプマイヤー兄弟の従弟で建築家のハンス・キャンプマイヤー (Hans Kampffmeyer) が会長職をベルンハルトから引継ぎ、大都市批判を共通項とする様々な改革の関心を吸引して現実路線を取るようになってからのことである。⁶¹ その後ハンブルクやシュ

⁵⁸ Krückemeyer, *ibid.*, p. 22.

⁵⁹ Linse, Ulrich, *Organisierter Anarchismus im Deutschen Kaiserreich von 1871*, Berlin, 1969, p. 88.

⁶⁰ Hartmann, *ibid.*, p. 135. 註 106.

⁶¹ Schollmeier, *ibid.*, p. 61.

トゥットガルト、マンハイムやミュンヘン等の都市に独立した「田園都市協会」ができ、1910年代には「田園都市」が魅力的な言葉として人々の口に登るようになる。⁶²しかし多くの都市がこの理想の共同体像を実現するには、ドイツにおける平和な時間はあまりに短か過ぎた。田園都市運動のその後の発展については次稿において紹介するつもりである。

【その他の参考文献】

- ・平井正『ベルリン：1918-1922』せりか書房，1980.
- ・E・ヨーハン/J・ユンカー『ドイツ文化史』三輪晴啓他訳，サイマル出版会，1975.
- ・ウォルター・ラカー『ドイツ青年運動』西村稔訳，人文書院，1985.
- ・ウルリヒ・リンゼ『生態平和とアナキー』内田俊一他訳，法政大学出版局，1990.
- ・同『ワイマール時代の予言者たち』奥田隆男他訳，ミネルヴァ書房，1989.
- ・ハリー・ケスラー『ワイマル日記（上・下）』松本道介訳，富山房，1993.
- ・月尾嘉男・北原理雄著『実現されたユートピア』鹿島出版会，1980.

⁶² Krabbe, *ibid.*, p. 31.

Eine Utopie der Moderne:

Das Phänomen Gartenstadt in Deutschland (1)

— Lebensreformbewegungen um Jahrhundertwende —

Miyuki SOEJIMA

Das Jahr 1898 ist in die Geschichte des Utopismus als das Erscheinungsjahr der Gartenstadtidee eingegangen. In diesem Jahr erschien in London das Buch von Ebenezer Howard (1850-1928) *To-morrow: a Peaceful Path to Real Reform*, das 1902 unter dem abgewandelten Titel *Garden Cities of To-morrow* neu herausgegeben wurde. Die Abhandlung sollte zum theoretischen Grundstein der Gartenstadtbewegung sowohl in Großbritannien als auch in verschiedenen Ländern einschließlich Japan werden. Die Gartenstadt sollte eine ideale Verbindung von Großstadt und Land sein, mit Arbeitsmöglichkeit anbietender Industrie, Einfamilienhäusern mit Garten auf dem Boden von gemeinnützigem Besitzer, und Grüngürtel um die Stadt zur landwirtschaftlichen Nutzung. Das war gleichsam eine Utopie der Moderne.

Das Konzept der Gartenstadt hat sich in England in zwei Gartenstädten, Letchworth und Welwyn, verwirklicht. Der erste praktische Versuch in Deutschland war die Gründung der Gartenstadt Hellerau bei Dresden. Ihre Geschichte wurde aber, im Gegensatz zu den Englischen Beispielen, die schon frühzeitig zum Gegenstand wissenschaftlicher Betrachtung wurden, erst nach der Wiedervereinigung zum Zentrum des Interesses an der deutschen Gartenstadtbewegung. Diese Arbeit versucht, die Entwicklung der ersten deutschen Gartenstadt aufzuzeigen, und inwiefern deren Inhalte eine kulturgeschichtliche Untersuchung wert sind, als ein Beispiel des Strebens nach der Idealgesellschaft unseres Jahrhun-

derts.

Die Gartenstadtbewegung stellt eine Reaktion auf die Mißstände in den Großstädten des 19. Jahrhunderts dar. Als Antwort auf die Großstadttübel, wie Verarmung und Proletarisierung infolge der Industrialisierung und Urbanisierung, bildete sich ein breites Spektrum von Reformbestrebungen. Lebensreformbewegungen wie Vegetarismus, Antialkoholismus, Naturheilkunde, Nacktkultur, Kunsterzieherbewegung, Kleidungsreform, Reformpädagogik, Bodenreform, Siedlungsbewegung u.s.w. haben ein zentrales Thema in einer Rückwendung auf einen mit der Natur harmonisierten Lebensstil. Sie sind daher ein mitwirkender Gesamtkomplex der Lösungsversuche der aktuellen Probleme der Gesellschaft, so sektiererisch jede dieser Bewegungen auch aussehen mag. Beispiele ihrer Interdependenz sind Vegetarismus, der bei manchen Siedlungen als ein Grundkonzept betrachtet wurde, und Nacktkultur, die aus der Praxis der Naturheilkunde entstanden ist und mit reformpädagogisch geprägter Körperkultur zusammen ins Streben nach der völkischen Körperzucht der Weimarer Zeit einmündete. Der Wanderklub für Arbeiter, das Gegenstück zum bürgerlichen Wandervogel, war ein Versuch, die Arbeiter vom Alkoholismus abzulenken, und diese Bemühung sollte am kunsterzieherischen Versuch, wie Leseräume- und Volkshausbau für die Arbeiterschicht, mitwirken. Die Gartenstadtbewegung war zwar ein Teil der Lebensreformbewegungen, aber darüber hinaus wurde die Gartenstadt als ein Ort konzipiert, wo auch alle sonstigen Reformideen der Zeit am sichersten und gedeihlichsten zur Entfaltung und Gestaltung kommen können. In Hellerau versuchte man in der Tat solche verschiedene Ansprüche im Rahmen eines ganzheitlichen Reformbestrebens zu verbinden. Daher bemüht sich diese Arbeit, als die erste einer Serie, einen kurzen Blick auf die Palette der Lebens-

reformbewegungen als kulturelle Gesamterscheinung vor und nach der Jahrhundertwende zu werfen.